

## 資 料

障害のある人びとの選択決定に関する研究の展望  
—個人と環境の相互作用の視点から—

宮 本 雅 美\*・加 藤 元 繁\*\*

先行研究では、障害のある人びとの QOL 拡大として、好みの表出や選ぶ能力を評価して介入すること、選択機会を設定すること、選択による行動への影響に関して検討されてきた。障害のある人びとの選択決定は他者が媒介していることが多いことをふまえて、本稿では個人と環境の相互作用という視点から障害のある人びとの選択決定に関する研究を展望した。その結果、自己決定の援助として、選択肢の拒否や他の選択肢を要求する機会の設定が必要であると示唆された。そして他者を行う活動において、選択決定への影響を検討するために活動中の社会的相互作用を分析すること、選択決定による相互作用への影響を検討すること、自律性の発達を促す選択決定を教える方法を検討すること、相互作用としての選択決定の満足度を評価することが今後の課題として挙げられた。

キー・ワード：選択決定 社会的相互作用 自己決定 援助 拒否

## I. 選択に関する研究の流れと本稿の目的

1970 年代終わりから障害のある人びとの選択決定 (choice making) に関する研究が増加しており、それらの研究では、好みの表出や選ぶ能力を評価して必要に応じて介入することや日常生活において選択機会を設定することの重要性が指摘され、選択決定によって選択者の行動が変化することが示されてきている (Kearney & McKnight, 1997<sup>16)</sup>; Kern, Vorndran, Hilt, Ringdahl, Adelman, & Dunlap, 1998<sup>18)</sup>; Lancioni, O'Reilly, & Emerson, 1996<sup>21)</sup>)。以下にこれまでの研究の流れと本稿の目的を挙げる。

## 1. 選択機会を提供する意味

障害のある人びとは障害のない人びとに比べ、自ら選択決定を行う機会が制限されていることが多い (Kishi, Teelucksingh, Zollers,

Park-Lee, & Meyer, 1988<sup>19)</sup>; Wehmeyer, Agran, & Hughes, 1999b<sup>41)</sup>)。しかし、選択決定できることは QOL の重要な指標の一つであるとされており (Hughes, Hwang, Kim, Eisenman, & Killian, 1995<sup>12)</sup>)、日常生活において選択機会を提供することや、そのための方法を検討すること (Sigafos, Roberts, Couzens, & Kerr, 1993<sup>39)</sup>) は重要といえる。また Wehmeyer, Agran, and Hughes (1999a<sup>40)</sup>) は教育の目標として「自己決定」を挙げ、それを構成する 12 の要素 (意思決定スキル, 自己教示スキル, 自己理解など) の中でも、選択決定スキルが中心となることを指摘している (Wehmeyer ら, 1999b<sup>41)</sup>)。学校において選択機会を設定する方法が示されている (Shevin & Klein, 1984<sup>32)</sup>) が、選択決定を教えていくために選択機会を提供することも必要と考えられる。

## 2. 選択決定が選択者の行動に与える影響

選択機会を提供することは、障害のある人び

\* 筑波大学心身障害学研究科

\*\* 筑波大学心身障害学系

との権利として重要であることに加え、選択決定により選択者の行動が変化することからも、介入として有効であると考えられている。例えば、Dunlap, dePerczel, Clarke, Wilson, Wright, White, and Gomez (1994<sup>3)</sup>)は5歳の情緒障害児に、読み聞かせの話を教師が選択する条件(選択なし条件)、対象児が選択する条件(選択あり条件)、選択なしで好みと考えられる話が提示される(先に行われた選択あり条件4セッションで対象児が選択した話を4セッション同じ順番で提示する)条件(yoked条件)を設定した。その結果選択あり条件では、選択なし条件やyoked条件よりも話を聞いているときの不適切行動が低く、課題従事が高かった。このことからDunlapら(1994<sup>3)</sup>)は、好みの影響以上に、選択決定の行為自体が不適切行動の減少と課題従事行動の増加に効果があった可能性を示唆している。

他に、課題と強化子の両方を選択できることによって、どちらも選択できない場合よりも課題従事行動が増加し、問題行動が減少することが示されている(Dyer, Dunlap, & Winterling, 1990<sup>4)</sup>)。しかし、強化子を選択する機会が与えられた場合と与えられてない場合で、スイッチ押しやスタンプ押しなどの標的行動の生起率に差があるかを検討した研究では結果が一致していない(Lerman, Iwata, Rainville, Adelinis, Crosland, & Kogan, 1997<sup>22)</sup>; Smith, Iwata, & Shore, 1995<sup>37)</sup>)。その理由として、課題遂行前か遂行後かという選択機会を与えるタイミングが異なることが考えられ、選択決定による行動の変化を検討するためには、条件を統制する必要があるといえる。

選択決定することにより適切な行動が増加し、不適切な行動が減少するメカニズムに関して、明確な結論は出ていないが、効力感やコントロール、自律性を持って行動することに関係していると予測されている(Dunlapら, 1994<sup>3)</sup>)。それを考慮し、選択決定が強化的となるメカニズムを明らかにすること(Lermanら, 1997<sup>22)</sup>; Sigafos, 1998<sup>33)</sup>)や、選択決定によっ

て重度の障害がある人びとの行動も変化するかを検討すること(Hughes, Pitkin, & Lorden, 1998<sup>13)</sup>)が課題として指摘されている。

### 3. 相互作用としての選択決定

行動分析では、弁別刺激—反応—随伴刺激という個体と環境の相互作用として表現する三項随伴性の枠組みで行動を捉える(望月, 1995a<sup>24)</sup>)。選択行為も「行動」の一つであり、その個人が周囲の環境やそれまでの経験から独立して存在することはない(望月・野崎, 1998<sup>27)</sup>)。また、選択機会や選択決定は他者の媒介を必要とした社会的—伝達的な相互作用である(Sigafos, 1998<sup>33)</sup>)ことから、周囲の環境や経験のなかでも他者との相互作用を考慮することが必要と考えられる。

望月(1995b<sup>25)</sup>)はコミュニケーションとしての選択決定には、①単純な行為をことば同様のコミュニケーションの手段にする、②コミュニケーションの目的としての「選択」を重視する、の2つの意味があることを指摘している。コミュニケーションを個人の能力としてではなく、社会的行動として捉えると、個人と環境の両方へのアプローチを行うことが、コミュニケーションとしての選択決定の援助といえる。Wehmeyerら(1999a<sup>40)</sup>)は自己決定行動を構成する選択決定スキルや問題解決スキル、目標設定と達成など12の要素の中でも選択決定を重視している。また、望月(1996<sup>28)</sup>)は自己決定を“他者に強制されずに物や事を本人が「選択」する事態”とし、個人と周囲との社会的関係であることを述べている。多くの人が完全に自立し、一人で行為を起こし、外的な影響を受けないということではなく、障害に関する分野は、すべての人は他者からの影響を受けるため、望ましい結果として相互依存を認識する方向に動いてきている(Wehmeyerら, 1999a<sup>40)</sup>)。このことから、個人と他者の相互作用に改めて焦点を当てることで、選択決定が強化的となるメカニズムの検討など、選択決定に関する研究の課題の解決につながると考えられる。

#### 4. 本稿の目的

これまでの選択決定に関する研究では、選択機会を設定し保障することは環境側の問題として、選択決定ができないあるいは選択決定が行動に変化をもたらすかということは、個人のレパートリーや能力の問題として取り上げられてきた。そこで本稿においては、個人と環境の相互作用という視点から、障害のある人びとの選択決定に関する研究を展望する。すなわち、自己決定を援助する、自律性を促進するために他者がどのように関わるべきか、他者との社会的相互作用の関係をどのように捉えるかを検討し、相互作用としての選択決定における今後の課題を挙げることを目的とする。

### II. 選択決定における他者の役割

物理的に選択肢が存在するだけで選択できる可能性もあるが、障害のある人びとの多くは適切な選択機会と選択行動自体に対する援助が必要である(望月, 1995a<sup>24)</sup>)。以下に、選択決定に他者がどのように関わるべきかについて検討する。

#### 1. 選択機会の提供と選択結果の提供

障害のある人びとの選択決定において、他者は選択機会を設定し、選択者が選んだ結果を与えることが多い(Sigafoos, 1998<sup>33)</sup>)。前者の例として、個人に応じて食べ物や飲み物の実物(小塩・石川・今出, 1994<sup>30)</sup>; Sigafoos & Dempsey, 1992<sup>34)</sup>)、活動で用いる物品(Browder, Cooper, & Lim, 1998<sup>2)</sup>; Nozaki & Mochizuki, 1995<sup>28)</sup>; 山田, 1995<sup>42)</sup>)、活動を示す写真(藤原・岡田・平澤, 1997<sup>5)</sup>; 箱崎・山根・徳永・和田・岡村・古賀・松山・有延, 1996<sup>9)</sup>)など選択肢の形態を決定し、選択肢を目の前で直接提示する(藤原ら, 1997<sup>5)</sup>; Sigafoos & Dempsey, 1992<sup>34)</sup>)、自由に選択できるように他者から離れた場所に選択肢を配置する(Hwang & Hughes, 2000<sup>14)</sup>; Nozaki & Mochizuki, 1995<sup>28)</sup>; 奥田・井上, 1999<sup>29)</sup>)、どれがいいか尋ねる、選ぶように教示する(Nozaki & Mochizuki, 1995<sup>28)</sup>; 小塩ら, 1994<sup>30)</sup>; 鈴木・藤田, 1997<sup>38)</sup>)ことが挙げられ

る。

また後者には、対象児が食べ物や飲み物の提示に対して接近や注視を示したら、その物品を与える(Sigafoos & Dempsey 1992<sup>34)</sup>; Sigafoos, Laurie, & Pennell, 1995<sup>35)</sup>)こと、対象児が選択を表出した後に「はい、どうぞ」と応じ、対象児に取らせる(小塩ら, 1994<sup>30)</sup>)ことなどがある。

#### 2. 選択行動の形成

選ぶことを教えるために、提示した遊具への反応に対して、その遊具で遊ぶという結果を与える(山田, 1995<sup>42)</sup>)、指さしによる選択の表明と、実際に選択したものを手に取ることや選択した遊具のある場所に移動するといった選択の行為とを分けて指導する(小塩ら, 1994<sup>30)</sup>; 山根・徳永・和田・岡村・古賀・松山・内山・花田, 1996<sup>44)</sup>)、すでにある反応を選択行動(選択の表出)として機能させる(鈴木・藤田, 1997<sup>38)</sup>)などの方法がある。その際、他者はモデルを示す、対象となる人びとの選択決定に対して言語賞賛する、選択の結果を与える、選択できない場合には身体的援助を行うなど直接的に関わっている。

選択行動の生起頻度を高める方法に、2つの皿の一方にのみ食べ物(この場合好みの食べ物)を載せて提示すること(小塩ら, 1994<sup>30)</sup>)、好みと報告されている食べ物とその反対の味の食べ物を提示すること(小塩ら, 1994<sup>30)</sup>)、2つの刺激のうち1つは空の箱や白いカードなど関係のないものを提示すること(鈴木・藤田, 1997<sup>38)</sup>)などがある。小塩ら(1994<sup>30)</sup>)は、選択行動の形態が同じであっても、あるかないかを選ぶことと好きなものを選ぶことは機能的に異なるが、「ある」の指さしから「好み」の指さしに比較的速やかに転移したことを示している。つまり、反応型として選択行動を形成した(鈴木・藤田, 1997<sup>38)</sup>)後には、選択肢を増やすなど、好みの物品を選ぶ手続きを行う必要がある(Shevin & Klein, 1984<sup>32)</sup>)。

#### 3. 要求としての選択行動の形成

要求言語行動の成立を確認するために、対象

児が要求していない物品を提示する手続き（誤物品提示手続き）を行うことが効果的であると示唆されている（Yamamoto & Mochizuki, 1988<sup>43)</sup>）。同様に、選択者が選択した後に選択していない物品を提示することで、選択決定が要求として機能しているかを確認することができる。

Sigafoos and Dempsey (1992<sup>39)</sup>)は、重複障害児が接近によって選択した食べ物や飲み物が口元に運ばれたときには口にしますが、選択していない物であれば口にしない、というように分化することを示した。一方で、選択していない物でも受容することもあり、その要因の分析と介入が必要である（Sigafoos ら, 1995<sup>35)</sup>）。

藤原ら (1997<sup>5)</sup>) は、音声言語の乏しい子どもが欲しいものを選択した後で、選択した物品の提示と確認（「これですか？」）に対してはうなずきによる「はい」の反応を、選択していない物品の提示と確認には首を横にふる「いいえ」の反応を、モデル呈示や身体的援助によって形成した。これは、要求者の要求物品を提供者に伝える御用学習場面（Yamamoto & Mochizuki, 1988<sup>43)</sup>）と異なり、自らの要求をより意図的に伝えることを学習できたと指摘している（藤原ら, 1997<sup>5)</sup>）。

#### 4. 拒否する選択肢の設定

選択していない物品を受け取ることを拒否する以外に、従事している活動を止める（Kennedy & Haring, 1993<sup>17)</sup>）、課題中に自傷行動を示す（Belfiore, Browder, & Lin, 1993<sup>1)</sup>）、取り出した遊具を捨てる、一度取り出したものを戻す、取り出さない（山田, 1995<sup>42)</sup>）、遊具の写真への指さしで選択を表明したにも関わらず遊具のある場所に移動しない、写真を指さししない（箱崎ら, 1996<sup>9)</sup>）といった行動が観察され、それらの拒否に対する介入が行われている。

Kennedy and Haring (1993<sup>17)</sup>) は重複障害児が活動を 5 秒以上やめたときに、「交換してください」というテープが流れるスイッチを押すことを指導した。箱崎ら (1996<sup>9)</sup>) は写真による活動の選択後に遊具のある場所に移動しない場合

や選択しない場合、指導者が「NO！べつのおもちゃちょうだい」と書かれたカードへの指さしのモデルを示し、別の遊具の写真が入っているファイルを提示して再度選択させた。これらの研究では、現在の活動、あるいは選択肢の拒否や他の選択肢の要求として、スイッチを押す行動や「NO！」カードを選択する行動は増加したことが示された。

Belfiore ら (1993<sup>1)</sup>) は機能分析により自傷行動が課題逃避であるとされた重度障害者に対し、好みの課題と好みでない課題を提示し、好みでない課題を近づけて「嫌なら“No”と言いなさい」と言語キューを与え、“No”が生じた場合には好みの課題を選択させた。問題行動を示す場合に課題と強化子の選択機会を設定する（Dyer ら, 1990<sup>1)</sup>）ことや、課題逃避の機能がある問題行動に対しては好みの課題を設定する（Ringdahl, Vollmer, Marcus, & Roane, 1997<sup>31)</sup>）ことで問題行動が減少することが指摘されているが、Belfiore ら (1993<sup>1)</sup>) の研究は、障害のある人が自身の行動によって環境の変更を要求する機会を設定した（望月, 1995b<sup>25)</sup>）といえる。しかし、指導者の言語キューなしでの生起が低かったため、今後言語キューがなくても拒否できるような手続きを行うことが必要であるといえる。

Nozaki and Mochizuki (1995<sup>28)</sup>) は重度の知的障害者に余暇活動の選択セッションを継続する中で、終了の選択肢（ノート）を設定し、日常的にセッション終了時にはノートを選択するようにプロンプトした。その結果、好みの活動を示す選択肢がない選択機会において対象者は自発的にノートを選択してセッションを終了させることができた。

選ぶことや拒否することによって個人の好みや自由を表明することに加え、自分自身の選択決定に責任を持つことを学習することができることが望ましい。そのためには拒否することも含めて選択肢を充実させることが必要である（望月・野崎, 1998<sup>27)</sup>）。選択機会における拒否は好みを同定する際にも考慮する必要があるこ

とが指摘されており (Lohrmann-O'Rourke & Browder, 1998<sup>23)</sup>)、今後さらに検討が必要である (Kearney & McKnight, 1997<sup>16)</sup>)。

### III. 活動の選択決定と他者との関係

選択決定は個人の過去の経験が関係しており (望月・野崎, 1998<sup>27)</sup>)、活動の選択決定も経験によってなされる。活動を選択する際に、選択した活動に他者がどのように関係するか、また選択決定によって他者との相互作用に影響を与えるかについて検討する。

#### 1. 選択決定に及ぼす他者の影響

Lancioni, Oliva, Andreoni, and Pirani (1995<sup>20)</sup>) は、重度重複障害者の作業状況 (一人でやるかまたは障害を持つ仲間と共に行うか) の好みを選択によってアセスメントした結果、仲間と共に行うことを選択することが多かったことを示した。この研究では仲間と共に行うことを好む要因や作業効率について明確に分析していないが、作業中の身体接触や作業に向かうまで一緒に移動することが要因であると示唆されている (Lancioni ら, 1995<sup>20)</sup>)。仲間と行うことが好みであることに加え、仲間と行う状況で作業効率が高いことを示され、仲間と行うことを好む要因が明確にできれば、作業を行う状況の選択を他の場面にも設定できると考えられる。

また、選択機会に立ち会う人が異なることで、選択する活動が異なることが示されている (Nozaki & Mochizuki, 1995<sup>28)</sup>)。この場合、過去に特定のひとと共に活動を行った活動が強化的であり、選択機会に立ち会うことでその人が弁別刺激となっていると考えられる。山田 (1995<sup>42)</sup>) は発達障害のある児童に選択要求行動を形成する過程で、始めは一人で遊ぶ活動を選択することが多かったが、指導者と二人で遊ぶ活動の選択が増加したことを示した。選択機会を繰り返していくことで指導者と児童の社会的関係が生まれてくる (山田, 1995<sup>42)</sup>) としているが、選択機会の提供—要求の充足の繰り返しによって指導者が強化的になったのか、それとも選択した活動における指導者の関わり方が強

化的だったのかは明確でなく、何が強化となって選択決定がなされたか検討する必要がある。

他者に強制されない選択には、選択することを強制されない選択機会を設定することと選択する内容を強制されない選択があると考えられる。選択決定には他者が関わるが、あらかじめ拒否の選択肢を設定しておく (Nozaki & Mochizuki, 1995<sup>28)</sup>) ことで選択することを強制しないようにすることができる。また、選択した活動での情動や選択した活動での従事率を測定する (Kennedy & Haring, 1993<sup>17)</sup>) ことに加え、選択しているときにも表情を分析することで、選択が強制されていないか評価することも一つの方法であると考えられる。

#### 2. 選択決定が相互作用に与える影響

Kennedy and Haring (1993<sup>17)</sup>) は、重複障害のある子どもが障害のない同年代の仲間とともに活動を行う際に、選択機会がある条件 (マイクロスイッチで目の前の活動を拒否して新しい活動を要求でき、それに対しては仲間が応じる) と選択機会がない条件 (仲間が活動を選択する条件と、先に行った選択機会がある条件において、対象児が選択した遊具を順番と時間を等しく提示して活動を行う条件《yoked 条件》の2つ) とで活動従事率と情動に違いがあるか比較した。その結果、4名中2名は選択機会がある条件で最も活動従事率とポジティブな情動が高く、1名は仲間が選択した条件で活動従事率とポジティブな情動が高く、1名は差がなかった。Jolly, Test, and Spooner (1993<sup>15)</sup>) は障害のある子どもが健常の子どもとの活動において、活動内容を示すバッジを一緒に行いたい仲間に見せる、あるいは指さすことを訓練した結果、バッジを用いた選択回数 (研究においてはプレイオーガナイザー：遊びの始発としている) とおもちゃの分配が増加した。

活動において相互作用を行う相手が指導者でなく同年代の健常児の仲間である場合、選択決定の機会が与えられていることは、自分の要求を伝える、自分から始発する機会となるため、包括教育場面において参加を促すことができ

る。ただし、仲間（広くは他者）の関わり方が選択する遊具や選択する回数、その後の活動従事などに影響を与えることも考えられるため、活動での仲間の行動、対象児との相互作用を分析することで、選択決定に影響する環境の変数の一つが明らかになる可能性も少なくない。また、仲間との活動において選択決定できることと、自分一人で行う活動を選択決定できることとの違いを検討することで、サービスを提供する人と受ける人の間での選択機会の提供と選択決定という相互作用以外に、選択決定の機能について検討できると考えられる。

重複障害者の余暇スキルの指導に関する研究において、Wall, Gast, and Royston (1999<sup>39)</sup>) は重複障害者が余暇スキルを獲得した結果、自由時間において施設のスタッフが提供した選択機会が増加したことを示した。そして、対象者は提供された選択機会に応じて決定することが増加し、さらに社会的相互作用も増加したことが示された。Wall ら (1999<sup>39)</sup>) の研究では、選択決定できるようになったことと相互作用が増加したことの因果関係は明確でないが、関連があることが示唆される。つまりこれは行動の選択肢の拡大が自己決定の援助である（望月, 1998<sup>27)</sup>）という考えに一致しているといえる。

#### Ⅳ. 相互作用による自律性、自己決定

選択決定は自律性の表明、あるいは自己決定の表出として捉えられている (Guess, Benson, & Siegel-Causey, 1985<sup>9)</sup>; 望月, 1996<sup>26)</sup>)。ここでは自律性の発達と選択決定の関係や自己決定について今後の課題を挙げることにする。

##### 1. 自律性の発達

Guess ら (1985<sup>9)</sup>) は選択決定には好みの表現としての選択、意思決定プロセスとしての選択、自律性と尊厳の表現としての選択という3つの側面があることを示し、自律性と尊厳の表現としての選択決定に関しては、障害のある人びとが学習性無力感を持たないようにするために、自分の環境をコントロールする経験を多くさせる必要があることを指摘している。

小塩ら (1994<sup>30)</sup>) は、重度知的障害児自身が写真によって活動のスケジュールを決め、そのスケジュールに従って行動することを形成した。そして、好む活動の順番を自分で決定することは、好みの表現としての選択や意思決定プロセスとしての選択 (Guess ら, 1985<sup>9)</sup>) に関係し、自分で決めたスケジュールを手がかりとして活動に必要な教材を選択して準備することは、自律性と尊厳の表現としての選択 (Guess ら, 1985<sup>9)</sup>) と関係していると述べている (小塩ら, 1994<sup>30)</sup>)。自ら選択したスケジュールを用いることで自己統制が見られるようになったことを示したが、さらなる自律性の発達につなげるため、指導場面以外の生活場面にも自己統制が般化するように環境を調整することや、与えられた選択肢に望むものがない場合に「ないこと」を表出できるような指導を行うことを検討する必要があると指摘している (小塩ら, 1994<sup>30)</sup>)。

他者の制御を受けていく中で、子どもは自分の行動を選択し調整できるようになる (福島, 1989<sup>40)</sup>) が、障害のある子どもの場合には援助が必要であると考えられる。選択決定を教えるには就学前レベルから学齢期を通しての広汎なプログラムが必要であることが指摘されており (Guess ら, 1985<sup>9)</sup>)、選択決定することと自己制御の発達とを合わせて検討することが必要であるといえる。

##### 2. 自己決定と満足

選択機会を提供することで問題行動が減少することが示されているが、その理由として、選択によってコントロールと自律性が高まることが考えられている (Sigafos, 1998<sup>33)</sup>)。問題行動の減少という点からだけでなく、選択決定と関係した質的な変数—自己満足、自己始発行動などを指標とした分析が必要である (Guess ら, 1985<sup>9)</sup>)。重度障害のある人の表情は未分化であるため指標として用いることはできない (Hayes, Adams, & Rydeen, 1994<sup>11)</sup>) という一方で、Green and Reid (1996<sup>7)</sup>) は表情を客観的に評価して定義することによって介入効果を検討する指標として有効であることを示してい

る。Kennedy and Haring (1993<sup>17)</sup>) は重度障害のある子どもが選択決定できる条件において、活動従事率が高く、ポジティブな情動も高かったことを示した。選択による自己決定の満足、表情を用いて評価する方法を検討することや、表情以外の指標を用いて検討することが必要であろう。

人の行動をコントロールする強化として、春木 (2000<sup>10)</sup>) は外的強化、内的強化、自己強化、他者強化の4つを挙げている。社会的な関係においてはそれが二重強化になっていることが多い (春木, 2000<sup>10)</sup>) ことから、選択決定に後続する相互作用を分析することで、他者の影響を受けるが他者から強制されていない選択であるかを検討することができると示唆される。

## VI. まとめ

本稿では、障害のある人びとの選択決定に関する研究を個人と他者の相互作用としてとらえる視点から展望した。その結果、障害のある人びとの自己決定を援助するために、選択肢を拒否することや他の選択肢を要求する機会を設定し、そのような選択を教えることが重要であると示唆された。他者を行う活動を選択決定する際には、選択決定に影響する他者との社会的相互作用を分析すること、また選択決定できることによって選択した活動における相互作用にどのように影響するかを検討することが今後の課題として考えられた。

また、他者との相互作用から自己統制が発達するということを、障害のある人びとの選択決定を援助していく際に考慮する必要があり、他者との相互作用としての選択決定の満足度を評価することが重要である。さらには、選択決定における相互作用の具体的な分析方法を含めた選択決定の援助について今後検討することが課題である。

## 文 献

- 1) Belfiore, P. J., Browder, D. M., & Lin, C-H. (1993) Using descriptive and experimental

analyses in the treatment of self-injurious behavior. *Education and Training in Mental Retardation*, 28, 57-65.

- 2) Browder, D. M., Cooper, K. J., & Lim, L. (1998) Teaching adults with severe disabilities to express their choice of settings for leisure activities. *Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 33(3), 228-238.
- 3) Dunlap, G., dePerczel, M., Clarke, S., Wilson, D., Wright, S., White, R., & Gomez, A. (1994) Choice making to promote adaptive behavior for students with emotional and behavioral challenges. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27(3), 505-518.
- 4) Dyer, K., Dunlap, G., & Winterling, V. (1990) Effects of choice making on the serious problem behaviors of students with severe handicaps. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 23(4), 515-524.
- 5) 藤原義博・岡田健彦・平澤紀子 (1997) 音声言語に乏しい発達遅滞児の選択要求場面における身振りによる「はい」「いいえ」反応の形成. 上越教育大学研究紀要, 17(1), 133-145.
- 6) 福島脩美 (1989) 社会性の発達と自己コントロール. *教育と医学*, 9, 39-45.
- 7) Green, C. W. & Reid, D. H. (1996) Defining, validating, and increasing indices of happiness among people with profound multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 29(1), 67-78.
- 8) Guess, D., Benson, H. A., & Siegel-Causey, E. (1985) Concepts and issues related to choice-making and autonomy among persons with severe disabilities. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 10(2), 79-86.
- 9) 箱崎孝二・山根正夫・徳永数正・和田恵子・岡村清美・古賀えり子・松山良子・有延利恵 (1996) 子どもの選択スキルを高めるための試みⅡ: 「自由遊び場面」での選択スキルの使用. *行動分析学研究*, 9(2), 113-120.
- 10) 春木豊 (2000) ヒューマン・リーンプォースメントー他者強化の概念ー. *心理学評論*, 43(4) 501-518.

- 11) Hayes, L. J., Adams, M. A., & Rydeen, K. L. (1994) Ethics, choice, and Value. 望月昭・富安ステファニー監訳 (1998) 倫理・選択・価値. 発達障害に関する 10 の倫理的課題. 二瓶社, 3-28.
- 12) Hughes, C., Hwang, B., Kim, J-H, Eisenman, L. T., & Killian, D. J. (1995) Quality of life in applied research: A review and analysis of empirical measures. *American Journal on Mental Retardation*, 99(6), 623-641.
- 13) Hughes, C., Pitkin, S. E., & Lorden, S. W. (1998) Assessing preferences and choice of persons with severe and profound mental retardation. *Education and Training in Mental Retardation*, 33(4), 299-316.
- 14) Hwang, B. & Hughes, C. (2000) Increasing early social-communicative skills of preverbal preschool children with autism through social interactive training. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 25(1), 18-28.
- 15) Jolly, A. C., Test, D. W., & Spooner, F. (1993) Using badges to increase initiations of children with severe disabilities in a play setting. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 18(1), 46-51.
- 16) Kearney, C. A. & McKnight, T. J. (1997) Preference, choice, and persons with disabilities: A synopsis of assessment, interventions, and future directions. *Clinical Psychology Review*, 17(2), 217-238.
- 17) Kennedy, C. H. & Haring, T. G. (1993) Teaching choice making during social interactions to students with profound multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 26(1), 63-76.
- 18) Kern, L., Vorndran, C. M., Hilt, A., Ringdahl, J. E., Adelman, B. E., & Dunlap, G. (1998) Choice as an intervention to improve behavior: A review of the literature. *Journal of Behavioral Education*, 8(2), 151-169.
- 19) Kishi, G., Teelucksingh, B., Zollers, N., Park-Lee, S., & Meyer, L. (1988) Daily decision-making in community residences: A social comparison of adults with and without mental retardation. *American Journal on Mental Retardation*, 92(5), 430-435.
- 20) Lancioni, G. H., Oliva, D., Andreoni, S., & Pirani, P. (1995) Working with a peer versus working alone: A preliminary assessment of preferences with four persons with multiple handicaps. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 7(1), 67-81.
- 21) Lancioni, G. E., O'Reilly, M. F., & Emerson, E. (1996) A review of choice research with people with severe and profound developmental disabilities. *Research in Developmental Disabilities*, 17(5), 391-411.
- 22) Lerman, D. C., Iwata, B. A., Rainville, B., Adelinis, J. D., Crosland, K., & Kogan, J. (1997) Effects of reinforcement choice on task responding in individuals with developmental disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30(3), 411-422.
- 23) Lohrmann-O'Rourke, S. & Browder, D. M. (1998) Empirically based methods to assess the preferences of individuals with severe disabilities. *American Journal on Mental Retardation*, 103(2), 146-161.
- 24) 望月昭(1995a) ノーマライゼーションと行動分析: 「正の強化」を手段から目的へ. 行動分析学研究, 8(1), 4-11.
- 25) 望月昭(1995b) 選択を主とした障害者のコミュニケーション—最重度の人の要求をどう受けとめるか—. 第22回日本脳性麻痺研究会講演集, 16-28.
- 26) 望月昭(1996) 発達障害リハビリテーションの実践・研究について—自己決定の援助技術を中心に—. 発達障害研究, 18, 279-282.
- 27) 望月昭・野崎和子(1998) コミュニケーション指導・再考⑦—「自己決定」のためのコミュニケーション—. 実践障害児教育, 305, 50-53.
- 28) Nozaki, K. & Mochizuki, A. (1995) Assessing choice making of a person with profound disabilities: A preliminary analysis. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 20(3), 196-201.
- 29) 奥田健次・井上雅彦(1999) 自閉症児における



- 対人関係の改善と遊びの変化—フリー・オペラント技法を適用した事例の検討—。特殊教育学研究, 37(3), 69-79.
- 30) 小塩允護・石川芽具実・今出正之(1994)重度障害を伴う子どもの選択行動。国立特殊教育総合研究所研究紀要, 21, 59-66.
  - 31) Ringdahl, J. E., Vollmer, T. R., Marcus, B. A., & Roane, H. S. (1997) An analogue evaluation of environmental enrichment: The role of stimulus preference. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30(2), 203-216.
  - 32) Shevin, M. & Klein, N. K. (1984) The importance of choice-making skills for students with severe disabilities. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 9(3), 159-166.
  - 33) Sigafoos, J. (1998) Choice making and personal selection strategies. J. K. Luiselli & M. J. Cameron (Eds.), *Antecedent control: Innovative approaches to behavioral support*. Paul H. Brookes Publishing Co. 187-222.
  - 34) Sigafoos, J. & Dempsey, R. (1992) Assessing choice making among children with multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 25(3), 747-755.
  - 35) Sigafoos, J., Laurie, S., & Pennell, D. (1995) Preliminary assessment of choice making among children with Rett syndrome. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 20(3), 175-184.
  - 36) Sigafoos, J., Roberts, D., Couzens, D., & Kerr, M. (1993) Providing opportunities for choice-making and turn-taking to adults with multiple disabilities. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 5(4), 297-310.
  - 37) Smith, R. G., Iwata, B. A., & Shore, B. A. (1995) Effects of subject-versus experimenter-selected reinforcers on the behavior of individuals with profound developmental disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 28(1), 61-71.
  - 38) 鈴木由美子・藤田和弘(1997)表出手段に制限のある脳性まひ幼児の eye pointing を用いた選択行動の形成。特殊教育学研究, 34(4), 1-10.
  - 39) Wall, M. E., Gast, D. L., & Royston, P. A. (1999) Leisure skills instruction for adolescents with severe or profound developmental disabilities. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 11(3), 193-219.
  - 40) Wehmeyer, M. L., Agran, M., & Hughes, C. (1999a) Self-determination as an education and transition outcome. In *Teaching self-determination to students with disabilities—Basic skills for successful transition—*. Paul H. Brookes Publishing Co., 3-29.
  - 41) Wehmeyer, M. L., Agran, M., & Hughes, C. (1999b) Assessing preference and teaching choice making. *Teaching self-determination to students with disabilities—Basic skills for successful transition—*. Paul H. Brookes Publishing Co., 97-118.
  - 42) 山田岩男(1995)養護学校における自発的選択要求行動の形成。行動分析学研究, 8(1), 12-21.
  - 43) Yamamoto, J. & Mochizuki, A. (1988) Acquisition and functional analysis of manding with autistic students. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 21(1), 57-64.
  - 44) 山根正夫・徳永数正・和田恵子・岡村清美・古賀えり子・松山良子・内山寛海・花田美恵子(1996)子どもの選択スキルを高めるための試みⅠ：通園施設における“活動の選択”をととして。行動分析学研究, 9(2), 105-112.

## **A Review of Studies on Choice-Making of Individuals with Disabilities : Social Interaction between Individuals and their Environments**

**Masami MIYAMOTO and Motoshige KATO**

Previous studies have been assessed the ability to express preference and make choice, suggested the importance of building opportunities as the enhancement of QOL, and evaluated the effects of choice-making on individuals' performance. It has pointed choice-making often requires the mediation of others. This article overviewed the studies of choice-making of individuals with disabilities at the point of interaction between individuals and their environments. It has suggested the importance of building opportunities to reject and repair options to support self-determination, and teaching that choice-making. Furthermore analyzing of social interaction within activities with others, determining the effects of choice-making on social interaction, developing the method of teaching choice-making to facilitate autonomy, and assessing self-satisfaction are required.

**Key Words :** choice-making, social interaction, self-determination, support, refusal and repair responses